

〔別紙2〕

## 審査の結果の要旨

氏名 秋山 剛

本研究は、タイのターク県において、ミャンマー人移民学校寄宿舎に居住している、思春期にある学生（12歳－18歳）を対象とし、その精神状態ならびに危険因子、またソーシャル・サポートとの関係を明らかにしたものであり、下記の結果を得ている。

1. 428人が参加し、304人が調査票のすべての項目を回答した。参加者の年齢の中央値は16歳であった。なお、そのうち、62.8%が、両親ともにミャンマー国内に居住していると解答し、また、11.8%が両親ともにタイにいと解答した。
2. 質問票 Stressful Life Events Check List を用いて計測した参加者のトラウマ経験の平均は5.2（標準偏差 2.7）であった。同じ調査票を用い、思春期の難民を対象にした過去の研究では平均値は6.6、また移民を対象にした研究では平均値は3.6であった。以上により、本研究の参加者は難民に匹敵する数のトラウマ経験をしていることが示された。
3. Depression, anxiety, internalizing problems, externalizing problems を測定する質問票 Hopkins Symptom Check List-37 A (HSCL-37A) より得られた総合スコアの平均値は63.1（標準偏差 11.4）であった。Post Traumatic Stress Disorder を計測する質問票の Reaction of Adolescents for Traumatic Stress (RATS) スケールの平均値は、10.6（標準偏差 9.9）であった。
4. Medical Outcome Survey Social Support Scale を用い、計測した参加者のソーシャル・サポートの受容可能性は、2.7であった。なお、参加者がもっとも「全く入手できない」と解答したのが多かったのは「Someone to share your most private worries and fears with」で、参加者の30.3%であった。
5. ロジスティック回帰分析により、参加者の属性およびメンタルヘルスとの関係を解析した結果、性別（女性）、またトラウマ経験の数が、参加者の精神状態への危険因子として示された。例えば、女性の男性に対する Anxiety へのオッズ比は7.86（95%信頼区間：2.30-26.85）であった。また、連続変数として解析されたトラウマ経験の数のオッズ比はHSCL-37A 全体で1.38（95%信頼区間：1.14-1.66）であった。ソーシャル・サポートの入手可能性は、参加者全体では、その精神状態との関係が有意とはならなかった。
6. 寄宿舎に一年以上在籍している参加者では、上記の性別とトラウマ経験の他に、ソーシャル・サポートのオッズ比が、HSCL-37A の Depression subscale ならびに RATS の総合得点、Hyperarousal subscale で有意となった。さらに、寄宿舎在籍期間（一年未満対一年以上）と、ソーシャル・サポートの間での交互作用を分散分析で解析したとこ

ろ、ソーシャル・サポートが優位になった項目のうちで **Hyperarousal subscale** で有意となった。なお、寄宿舎に一年未満在籍している参加者では、ソーシャル・サポートの精神状態との肯定的な関係は有意にならなかった。このことから、ソーシャル・サポートと精神状態の関係が、一年未満と一年以上在籍している参加者において異なることが示唆された。

以上、本論文はタイの寄宿舎に居住する、思春期のミャンマー人移民学生の精神状態、危険因子、また、そのソーシャル・サポートとの関係を明らかにした。本研究は科学的根拠に基づいた研究は希少であった当該対象について、その精神状態への危険因子等を同定した。さらに、当該対象は、自発的に精神保健に関するサービスを利用することは稀と考えられることから、将来の介入プログラム立案について、重要な貢献をなしており、学位の授与に値するものと考えられる。